

## 天神橋筋商店街で 関大生が案内人に

調査した商店街の活性化に一役買う  
この街のことなら「なんでも聞いてや」

●社会学部 社会システムデザイン専攻 3・4年次生  
与謝野ゼミ

日本一長い商店街として知られる天神橋筋商店街(大阪市北区)で、関西大学の学生が「町街人」のボランティアを務めている。観光や買い物に訪れる人々に、名所や目当ての店を教え、トイレの場所から街の歴史まで幅広く案内する“街のコンシェルジュ”。この活動は、社会学部社会システムデザイン専攻の与謝野有紀教授のゼミで同商店街の綿密な調査をしたことがきっかけで始まった。

上方落語の定席「天満天神繁昌亭」が昨年9月にオープンし、来客が増えて活気づいている天神橋筋商店街。土・日には“街のコンシェルジュ(案内人)”として、関大生が活躍している。

そろいの作務衣には「町街人」、のぼりには「なんでも聞いてや!」と書かれている。まだ始まって日が浅いためか、好奇の目を向けて通り過ぎる人もいる。しかし、遠慮がちに聞いてくる人、教えてもらった目的地に笑顔で向かう人が増えている。

1丁目担当の戸國竜兵さん(社会学部4年次生)は、「飲食店以外では天満宮や繁昌亭の場所を聞かれることが多いですね。どういうお店がいいですかと聞いてくる人には、会話をしながら答えを探していく感じです」と、その人の好みなどを聞き、要望に合わせる案内人ぶりが板に付いてきた様子だ。案内に限らず、自転車がパンクして困っている子どもに声をかけることもある。



戸國 竜兵さん(社会学部4年次生)

閑散とした商店街も少なくない昨今ではあるが、この街には活気があり、肌に触れて感じるような魅力があるという。しかし、「跡継ぎがいらないという話を耳にすることがあります。それで何代も続いて親しまれてきたお店がなくなっていくのは残念です」。

堀川豪紀さん(社会学部4年次生)は、「自分たちで下調べしてきたお店をお薦めしたところ、また立ち寄られて『良かったよ、ありがとう』と言われたときは、やっぱりお役に立っているのかなと思いました」とうれしそう。街の人たちがこの商店街に誇りを持って、「この商店街のことをお話しされるときには、すぐ生き生きしています」。

# LEADERS NOW!



戸國さんは、できれば自分たちでフリーペーパーを作りたいという。「百貨店にはないものがたくさんある商店街を、実際に肌で感じてもらうのが一番」と堀川さん。2人とも、ぜひ一度、1丁目から7丁目まで歩いてみてほしいという。南北2.6キロにわたる商店街には、さまざまな出会いや触れ合いがある。

この活動に参加しているのは、社会学部社会システムデザイン専攻の4年次生12人、3年次生1人。徐々に増え続けている。同専攻では商店街の活性化というテーマで、昨年4月にフィールドワークを開始し、商店街の店主らの意識調査を実施して、12月に「社会システムデザイン実習調査報告書」をまとめた。

「街の人たちはこの商店街を公共のものとしてとらえ、それを守っていこうとしています。自分だけの利益を追求するのではなく、社会全体を見ていく姿勢が大事。この取り組みも一過性のイベントで終わるのではなく、地道に続けて、じっくり育てていかなければならないと思います」と与謝野教授は話す。参加しているメンバーも、ゆくゆくは大学全体の活動になればと考えている。



堀川 豪紀さん(社会学部4年次生)

## 初監督作品の舞台は 十三の街、あの映画館

第47回日本映画監督協会新人賞受賞  
「ステレオタイプの大阪には違和感」

●映画監督  
小林 聖太郎 さん —法学部 1994年卒業—

小豆色の阪急電車が走る十三(大阪市淀川区)のごちゃごちゃした街並み。昨年、第47回日本映画監督協会新人賞を受賞した小林聖太郎監督の「かぞくのひけつ」の舞台は、関大生にとっては身近な街だ。小林さんも学生時代、所属していたスキー競技部の仲間と繰り出すことがあった。そこには、映画好きになじみの深い映画館「第七藝術劇場」があった。それは休館、閉館を経て今もある。この作品は第七藝術劇場の復活記念作品として製作された。

小林 聖太郎—こばやし しょうたろう

■1971(昭和46)年、大阪市生まれ。94年関西大学法学部政治学科卒業。ジャーナリスト今井一氏の助手を務め、95年に原一男監督が開いた「CINEMA塾」に第1期生として参加。同監督のドキュメンタリー「映画監督浦山桐郎の肖像」の助監督を務める。その後、「ナビィの恋」(中江裕司監督)、「グロッパ!」(バッチギ!) (以上井筒和幸監督)、「ニフトリはハダシだ」(森崎東監督)、「雪に願うこと」(根岸吉太郎監督)など、数多くの映画製作にかかわる。2006年、初の監督作品「かぞくのひけつ」で第47回日本映画監督協会新人賞受賞。ブログは、<http://kazokunohiketsu.seesaa.net/>

「かぞくのひけつ」の中に、主人公の高校生がガールフレンドと一緒に映画を見るシーンがある。映画館の暗がりでは、そばにいる人の体温を敏感に感じとれる。付き合ってから半年たつのに手も握れない賢治(久野雅弘)をなじり、挑発する典子(谷村美月)の大阪弁が炸裂する。

惚れやすい、というか女癖の悪い賢治の父親(桂雀々)としっかり者の母親(秋野暢子)の間でも、酸いも甘いも噛み分けられる大阪弁の絶妙な掛け合いが展開される。カイショナシの男とそれを支え続ける女といえ、『夫婦善哉』が思い浮かぶ。浮気相手のゆかり(ちすん)も含めて、登場する女性たちは、みんな不安定な状況にありながら誇らかに胸を張って生きている。背景に、愛憎劇を人情劇にしまう大阪の街がある。

大阪に生まれ育った者なら分かる大阪弁の自然さは、キャストのほとんどが大阪府出身であることを知ればうなずける。「僕自身、松屋町という人形問屋の街で育ちました。テレビによく出てくるコテコテの大阪人、ステレオタイプの大阪なるものにはすごく違和感がありました。かといって、大阪が嫌いというわけではない。赤の他人に対しても勝手に世話を焼くような、自他の垣根が低いゆるーいところ、ぬるーい身内感、ずうっというとうっとうしい時もありますが、たまに帰るといいなと思う」

小林さんは卒業後、関西大学の先輩でジャーナリストの今井



◀12月より東京渋谷・ユーロスペースにてレイトショー  
<http://www.kazokunohiketsu.com>

一さんの助手を務めた。「政界には興味がなかったが、政治には興味があった」ので、「大事なことは国民投票で決めよう!」などの取材にかかわった。

「かぞくのひけつ」は小林さんの初の監督作品。これまで、話題を呼んだ数々の作品の助監督を務めてきた。「助監督というのは、労働契約もなければ社会保障もなく、明治時代の職工みたいな生活です。現場で準備と撮影だけをして終わることが多いのですが、ギャラが出ないとしても、編集・音入れの仕上げまでかかわるようにしてきました」

根岸吉太郎監督の『雪に願うこと』の製作の際、撮影開始前の約2カ月間、冬の北海道の既舎に寝泊まりし、馬に餌をやったり馬糞の掃除をしたり、皆と同じ生活をしながら、東京にレポートを送ってリアリティーのあるシナリオを完成させていった。「撮影でお世話になる人とコミュニケーションを取ることが大事。『馬が増えちゃって来週から忙しいんだけど来れない?』今でもこんな電話がかかってきます」と笑う。

小林さんは関大時代、北海道でスキー競技部の合宿を行った。「映画も一人ではできない。思い通りにいかないことも含めて、合宿の集団生活の経験が後々生きたという。「その時は役立たなくても、大学時代はいろんな無駄なことをやったほうがいいですね。これからも、社会性を持ちながらも楽しめる映画を作っていきたい」